

# 沖縄に於ける原発事故の健康影響

2011年前後の医療機関患者数変化

矢ヶ崎克馬

## (はじめに)

日本に於ける病人や死者の数は福島原発事故の後、想像以上の増加を示しています。事実を隠ぺいする政治・マスコミ・「専門家」が犠牲を非常に大きくしていることは明瞭です。矢ヶ崎克馬；『日本で進む異常人口減少—人口動態調査より』に国によるデータを分析した結果、放射線の影響による死亡者が年間十数万人に及ぶことが明らかになりました。東京に於ける医療外来患者数は2011年が2010年以前の約1.3倍ほど上昇し、骨髄異形成症候群の患者数は2010年に比べ2013年は2.4倍から5.5倍に達していることを既に報告しています（矢ヶ崎克馬：『日本に於ける病院患者の増加』）。福島県立医科大学付属病院における手術数は激増していて、2010年に比して2012年の倍率が1.8倍以上の手術数を記録したものは30疾患に上ることを報告しました。特に3倍以上のものが9件もあります。沖縄に於いても放射能公害による健康被害は深刻な実態であることが判明しました。全貌をつかむのは困難ですが、公表されている記録から県内のいくつかの病院の診療実績を探りました。

## (1) 琉球大学付属病院

琉球大学の手術実績は2010年と2011年、2012年のみ公表されていました。

[http://www.senmon-i.com/detail/4700714\\_9.html](http://www.senmon-i.com/detail/4700714_9.html)

2011年の2010年に対する手術総数

琉球大学手術実績を表1に示します。2011年3月11日に福島原発事故が発生しますが、琉球大学病院における手術実績は福島事故が発生するまえの2010年に比較して事故発生後の手術数が飛躍的に多くなっていることを示します。2010年度の集計は9ヶ月（2010/7～2011/3）で行われていますので

(<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-Iryouka/0000023525.pdf>) 2010年の集計は年間に換算して比較を行います。2010年を基準とすれば2011年はその1.12倍、2012年は1.25倍になっています。事故後の2年間の平均は1.19倍となっております。この増加ぶりは偶然的なものではなく、放射能の影響が生じていると判断できます。

琉大附属病院の実績を比較検討するために、事故による健康影響が福島県内ではどのように出ているかを福島県立医大付属病院の手術実績により示します。

それが表2です。琉大と福島県立医大の手術実績は全く同じ統計によるものです。

表2を見ますと福島県立医大付属病院でも琉大附属病院でも同じように3.11以前と以降で手術数がクリティカルに増加しています。驚くべきことは福島県立医大の事故後2年間の増加数は琉大と同程度ですが、増加倍率は2年間共に琉大の方が凌駕して、福島県立医大を上回っています。

年	2010年	2011年	2012年
手術総数（9ヶ月）	3665		
手術総数（1年）	4887（換算）	5455	6133
2010年に対する倍率		1.12	1.25
平均		1.19	

表1 琉球大学付属病院の手術実績数の推移

	2010年	2011年	2012年
手術総数（9ヶ月）	5369		
手術総数（1年）	7158（換算）	7733	8826
2010年に対する比率		1.08	1.23
平均		1.15	

表2 福島県立医大付属病院の手術実績数の推移

後述の沖縄協同病院に於いては、7年間にわたる統計が明らかにされていますが、3.11以前に対する以後の総手術数は1.13倍と、琉大附属病院と同レベルの増加を示しています。これらの数値は沖縄は福島と同程度に原発事故後の影響を受けていると明確に判断できることを示しています。

<1>琉球大学で記録された倍率の高い疾患を疾患種類ごとに列挙いたしますと以下のとおりです。

- （脳）脳腫瘍（1.4）、非外傷性頭蓋内血腫（1.4）  
下垂体機能亢進症（1.1）
- （眼）白内障（1.3）、斜視（1.5）、網膜剥離（1.2）、  
糖尿病性増殖性網膜症（1.4）、  
硝子体疾患（1.1）、緑内障（1.0）、脈絡膜疾患（1.5?）
- （心臓）閉塞性動脈疾患（1.5）静脈・リンパ管疾患（1.5）
- （婦人科・新生児）  
卵巣良性腫瘍（1.5）、分娩異常（1.3）、
- （血液）急性白血病（1.3）、白血球疾患（1.6）、  
原発性免疫不全症候群（1.3）
- （諸臓器）肺の悪性腫瘍（1.7）、食道の悪性腫瘍（1.9）、  
胃の悪性腫瘍（1.2）、胆管・胆石・胆管炎（2.4）、すい臓・脾臓腫瘍（1.2）、腸閉そく（1.9）、  
腎盂・尿管の悪性腫瘍（1.5）、慢性腎炎症候群（1.2）、  
腎臓・尿路感染症（1.7）、上部尿路疾患（2.4）、

(外傷) 肘・膝の外傷 (1.8)、

目立つのは脳、心臓、眼、胆嚢、急性白血病、などあらゆる体の部位の疾患が増加しています。放射線被ばくによる懸念される疾患が網羅されている状況です。

< 2 > 他方、福島県立医大付属病院での倍率の高い疾患は以下のとおりです(1.2 倍以上)。

(脳) 非外傷性頭蓋内血腫、くも膜下出血、破裂脳動脈瘤

(眼) 白内障/水晶体の疾患、糖尿病性増殖性網膜症、緑内障、眼瞼下垂、

(耳鼻咽喉) 扁桃周囲膿瘍、急性扁桃炎、急性咽頭喉頭炎、睡眠時無呼吸、慢性化膿性中耳炎・中耳真珠腫、

(心臓) 弁膜症、閉塞性動脈疾患、静脈・リンパ管疾患、

(内臓など諸臓器) 小腸・大腸の悪性腫瘍、腹膜の悪性腫瘍、直腸肛門(直腸・S状結腸から肛門)の悪性腫瘍、胆嚢、肝外胆管の悪性腫瘍、胃十二指腸潰瘍、胃憩室症、幽門狭窄(穿孔を伴わないもの)、鼠径ヘルニア、骨格骨軟部の良性腫瘍、軟部の悪性腫瘍、膀胱腫瘍、前立腺の悪性腫瘍、ネフローゼ症候群、貧血(その他) 肺の悪性腫瘍

特に増加率の高いものを順にあげると次のとおりです(カッコ内は倍率)。

- ①(筋骨格系疾患) 軟部の悪性腫瘍(脊髄を除く。)(3.4)、
- ②閉塞性動脈疾患(2.9)、
- ③静脈・リンパ管疾患(2.9)、
- ④扁桃周囲膿瘍、急性扁桃炎、急性咽頭喉頭炎(2.6)、
- ⑤小腸の悪性腫瘍、腹膜の悪性腫瘍(2.3)、
- ⑥胆嚢、肝外胆管の悪性腫瘍(2.0)、
- ⑦非外傷性頭蓋内血腫(非外傷性硬膜下血腫以外)(1.7)、
- ⑧睡眠時無呼吸(1.7)、
- ⑨直腸肛門(直腸・S状結腸から肛門)の悪性腫瘍(1.7)。

これら増加率の高い疾病の両病院における共通性が高く、人体に対する放射線の影響が非常に多面的であることがうかがわれる。すなわち放射線被曝は一般に免疫力を低下させ、身体機能が弱く日ごろから弱点を持ったところに手術をしなければならない疾患として現れるのだと推察される。

## (2) 沖縄協同病院

沖縄協同病院の手術実績 [http://oki-kyo.jp/about/opejisseki\\_2008-2014.pdf](http://oki-kyo.jp/about/opejisseki_2008-2014.pdf) を表3に示します。

2011年より以前の年に比べ2011年以降の年平均は576件増加し、増加率は**1.13倍**になっています(耳鼻咽喉科が2011年に休止されましたので、これを除外すると1.16倍)。これに対応する数値として、福島県立医大の総手術数の比率は**1.15倍**になります。沖縄協同病院に於いても福島医大の増加とほぼ同じ増加状況です。7年間に及ぶ統計が示されており、明瞭な放射線被曝の影響が見て取れます。まぎれもなく沖縄協同病院に於いても放射線被害者が増加し、その一部が手術を受けるところまで至っているのが確認できます。なぜならば全診療科を通じて2011年以降が2010年以前と比べてはつきりクリティカルに増加しているから、その2011年に何があったかを探ると、放射能放出が大量になされた福島原発事故が境になっていることがデータで示されているからです。健康被害の由来は直接届いた放射能による外部被曝と食べ物による内部被曝があります。

年	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
手術総計	4177	4843	4577	5303	4895	5037	5195
平均	4532			5108 ((2011~2014) / (2008~2010)=1.13)			

**表3 沖縄協同病院に於ける手術実績**

特に増加した手術項目は、結膜(7.88倍)、眼房、網膜(5.17倍)、脾(3.83倍)、顔面骨、顎関節(3.38倍)、四肢関節、靭帯(2.18倍)、涙道(2.16倍)、となっていて目の疾患がダントツに多い状態でした。

これは私どもが実施した沖縄に避難している原発事故避難者へのアンケート結果は、3.11事故後悩まされた健康被害のトップが目に関するトラブルでしたが、同じ現象が沖縄県民にも及んでいたのです。

沖縄協同病院の手術報告の詳細(筆者が項目ごとにまとめた)を本論最後尾に載せます。

### (3) 県立中部病院

医療実績で公開されているデータを検索すると特徴が現れているのは心臓外科に関するものでした。下図、図1は心臓関係各種の手術の年度別施術数です。末梢血管・腎動脈、ロータブレーター、心臓再同期療法、アブレーションなどが2011年を境にして増加傾向を示しています。

さらに脳神経外科の施術数を図2に示しますが、その総数(グラフの下の表)は2011年で劇的に増加して、その後も高水準で変化しています。年平均で、2009年と2010年の平均に比し、2011年以降の年平均は1.2倍に達します。なお、疾病としては慢性硬膜下血腫が種類としては一番多いものです。この傾向は福島県立医大付属病院の手術数にも同様な傾向がみられ、「非外傷性頭蓋内血腫(非外傷性硬膜下血腫以外)」が2010年以前の2.3倍にも及んでいます。続いて水頭症シャント術、破裂脳動脈クリッピングと続きます。脳や心臓は新陳代謝のほとんど少ない組織に寄って構成されるものですが、放射線の影響は電離すなわち組織を断ち切る作用ですから放射線影響が大であることが医療研究では明瞭になってきています。

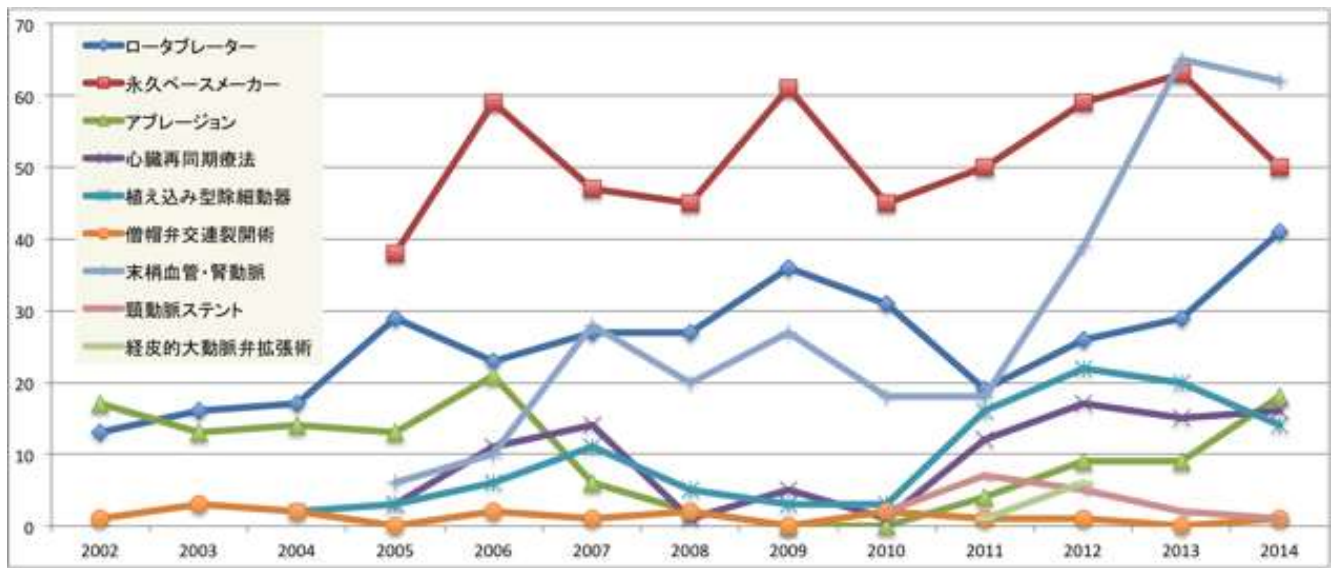


図1 県立中部病院のの心臓疾患の手術数

<http://www.hosp.pref.okinawa.jp/chubu/departments/cardiology.html>

#### (4) まとめ—沖縄被曝の原因—

今回の公的記録からのデータ取得ではもっと広い範囲での経年変化のデータを把握できませんでした。まだ調査途中です。しかし、得られた資料だけで十分に沖縄県民が放射能被害に遭っていて、これに伴い放射能犠牲者が多数いることを裏付けています。手術の増加はそれに至るまでの患者数で言えばその数倍に及ぶものと推定します。

多くの放射能の被害は体質として敏感な方、免疫力の低下されている方など放射能弱者にまず現れますが、今元気で“耐えて”いらっしゃる人も後発的な疾病、例えばがんなど、に苛まれる可能性が大であることが原爆被爆者の実態が明らかとしております。

放射能の健康被害は①沖縄に飛来した放射性微粒子を吸い込む、汚染された食物とともに食べる、微粒子が発射する放射線に当たる、②汚染地からもたらされた汚染食品を食することにより内部被曝する、③汚染が強いところを訪れて外部被ばくと内部被曝をする、等によります。

その中の一番可能性の高い原因としては、汚染食品を食することによる内部被曝が最も深刻であると思います。なぜなら、原発事故による土地汚染は沖縄の方が福島より1000分の1から10000分の1程度に少ないが、汚染地域からの食糧が多量に移入されています。福島県からの移入は都道府県単位としては東京、兵庫に次ぎ3番目に沖縄がランクされています。多量に汚染されている福島周辺県からの移入も大問題です。県民が大量に汚染食品を消費していることは間違いありません。加えて沖縄県民のユイマール精神が「食べて応援」をすぐ具体行動にするという優しさが被曝を増加させます。

「原発事故は住民を大量被ばくさせる体制で切り抜けよ」というのがチェルノブイリ以後の国際原子力サミットの基本路線です。国家的棄民政策を自己犠牲で、自らの命を捨てて、フォローしてはなりません。さらに「100mSv以下被害での健康被害は認められていません」などの虚偽の大宣伝に影響されて、多大な被害を受けているのに、実際の被害を無視する体制も健康被害を極大にしています。

また身体臓器が受ける健康被害は我々が想像する以上に敏感であり被害が多であることが隠されていて、今回の調査はそれが重大であることを示している可能性も大です。

日本に於ける大問題は放射能被曝を現実の問題ではなく心の問題として大キャンペーン

## 手術内訳

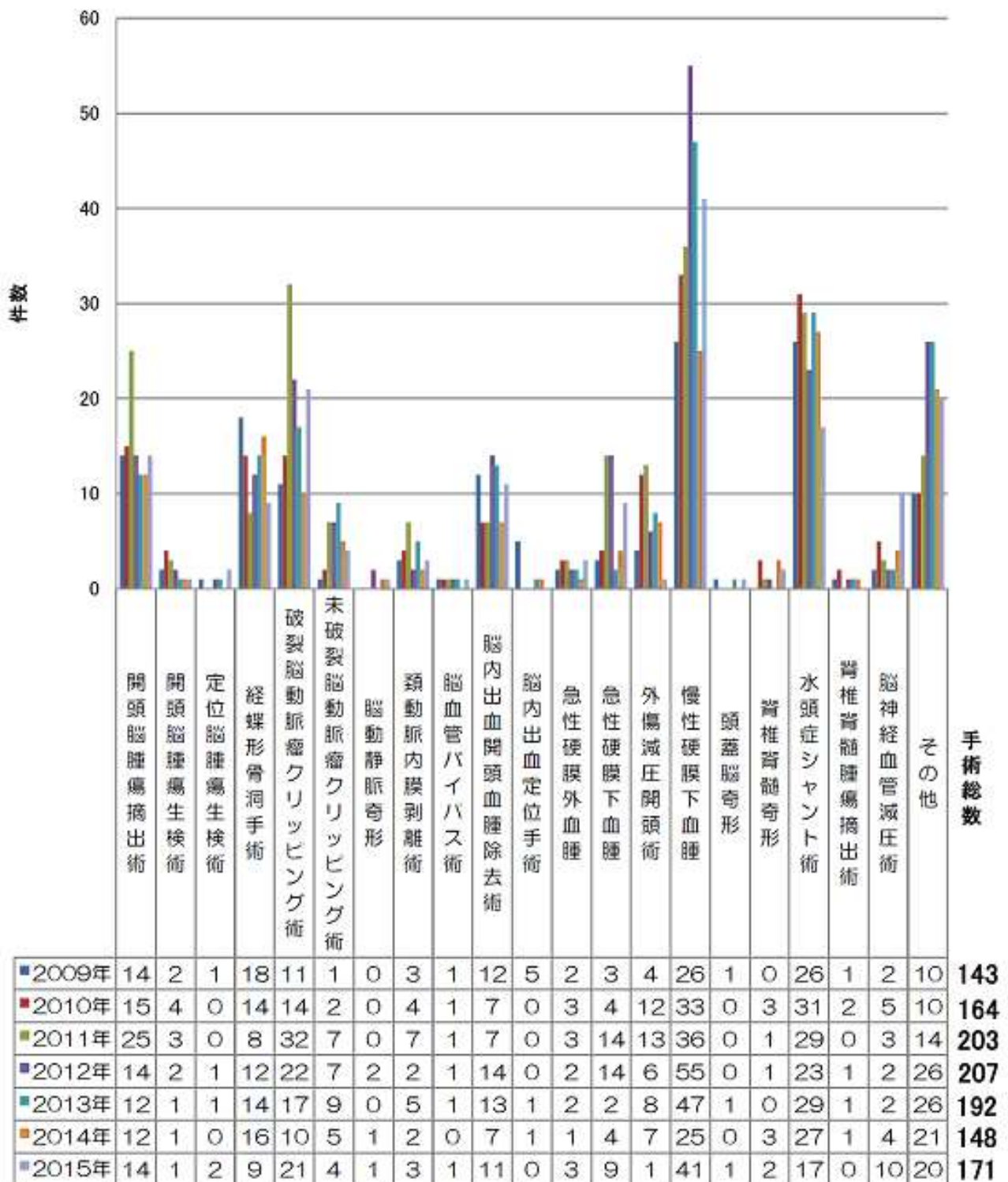


図2 中部協同病院の心臓疾患関係手術数（脳神経外科）

<http://www.hosp.pref.okinawa.jp/chubu/departments/neurosurg.html>

されていることです。それは汚染状況や放射能の被害を語る事が客観的にとらえられて検討される対象になるのではなく、「風評被害」として心の問題であるように大宣伝されていますが、実害なのです。少なくともチェルノブイリでは土地汚染が年間5ミリシーベルト（大雑把に言って3ミリシーベルトは土地汚染、3ミリシーベルトは内部被曝と算定）以上の土地では住むことも生産することも禁止されていることが、住民保護の観点から法律化されました（チェルノブイリ法）。日本ではチェルノブイリでは禁止された汚染地に住み続け、生産を続け、その生産物を日本全国の住民が食べることによって内部被曝被害を増加させているのです。この体制そのものの矛盾を民主主義の観点から見直す必要があります。

(了)

\*\*\*\*\*

付録

沖縄協同病院に於ける手術治療実績 [http://oki-kyo.jp/about/opejisseki\\_2008-2014.pdf](http://oki-kyo.jp/about/opejisseki_2008-2014.pdf)

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	総計	比率*
01.皮膚、皮下組織	1338	1388	1480	1394	1335	1275	1269	9479	0.94
02.形成	3	4	3	8	2	1	2	223	0.97
03.筋膜、筋、腿、腿鞘	39	40	42	48	64	38	19	290	1.05
04.四肢骨	267	256	281	294	262	340	377	2 077	1.18
05.四肢関節、靭帯	148	152	55	258	258	280	236	1 387	2.18
06.四肢切断、離断、再接合	35	25	35	29	18	19	13	174	0.62
07.手、足	80	77	21	57	54	45	50	384	0.87
08.脊柱、骨盤	39	55	56	62	69	96	87	464	1.57
09.頭蓋、脳	82	144	174	160	129	124	105	918	0.97
10.脊髄、末梢神経、交	16	31	27	20	31	27	31	183	1.1
11.涙道	0	0	8	6	7	10	0	331	2.16
12.眼瞼	2	1	2	0	0	3	4	112	1.05
13.結膜	1	0	1	0	4	5	12	223	7.88
14.角膜、強膜	0	0	0	2	5	1	0	8	
15.ぶどう膜	6	3	0	0	0	10	1	220	0.92
16.眼房、網膜	8	14	6	15	24	84	70	221	5.17
17.水晶体、硝子体	44	74	25	6	8	129	353	639	2.6
18.外耳	14	20	3	17	3	2	3	62	1.38*
19.中耳	172	92	89	96	27	2	0	478	0.91*
20.鼻	32	53	74	90	18	1	0	268	3.20*
21.副鼻腔	20	19	34	28	1	0	0	102	1.15*
22.咽頭、肩朶	46	63	36	68	8	0	5	226	1.41*
23.喉頭、気管	37	40	0	34	27	34	35	207	1.7
24.歯、歯肉、歯槽部、口蓋	1	0	0	0	0	0	0	1	0
25.口腔前庭、口腔底、頬粘	2	1	0	4	0	0	1	8	1.25
26.顔面	4	3	3	3	1	0	0	114	0.3
27.顔面骨、顎関節	1	5	0	3	6	5	13	333	3.38
28.唾液腺	2	1	2	1	1	0	0	7	0.3
29.甲状腺、副甲状腺	18	16	11	10	8	9	2	74	0.48
30.その他頸部	1	0	0	0	1	0	0	2	0.75
31.乳腺	25	21	30	31	30	27	29	193	1.15

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	総計	
32.胸壁	0	0	0	0	1	1	1	3	
33.胸腔、胸膜	2	2	0	1	2	2	1	110	1.12
34.縦隔	1	0	0	0	0	1	0	2	0.75

35.気管支、肺	4	0	0	2	1	0	0	7	0.56
36.食道	10	15	11	5	5	10	16	72	0.75
37.横隔膜	0	0	0	0	1	4	1	6	
38.心、心膜、肺動 40.静脈、冠	158	217	218	248	237	244	268	1590	1.26
39.動脈	359	441	474	474	365	416	399	2928	0.97
41.リンパ管、リンパ節	5	9	0	2	5	3	4	228	0.75
42.腹壁、ヘルニア	79	95	101	99	116	110	107	707	1.18
43.腹膜、後腹膜、腸間膜、網	24	22	10	17	43	25	27	168	1.5
44.胃、十二指腸	252	244	97	228	221	212	193	1447	1.08
45.胆嚢、胆道	195	258	291	297	316	339	371	2067	1.33
46.肝	4	14	2	14	10	12	13	69	1.84
47.脾	5	5	9	7	13	34	43	11116	3.83
48.脾	4	3	4	2	1	1	2	117	0.41
49.空腸、回腸、盲腸、虫垂、	212	322	403	394	485	484	476	2776	1.47
50.直腸	13	49	79	65	47	32	29	314	0.92
51.肛門、その周辺	21	10	12	11	10	2	2	68	0.44
52.副腎	0	0	2	1	1	0	2	6	1.5
53.腎、腎盂	9	5	10	7	11	0	1	443	0.59
54.尿管	16	43	43	59	51	0	0	212	0.8
55.腸脱	28	48	88	98	51	1	2	316	0.7
56.尿道	3	20	17	23	4	0	0	667	0.51
57.陰茎	1	4	5	2	3	0	0	115	0.38
58.陰嚢、精巣、精巣上体、精	6	7	3	6	7	0	0	229	0.61
59.精嚢、前立腺	22	19	4	19	15	0	0	779	0.57
60.外陰、会陰	4	8	0	8	2	5	12	339	1.69
61.室	0	0	7	5	10	3	4	229	2.36
62.子宮	49	70	58	68	55	75	51	426	1.06
63.子宮付属器	11	16	9	17	18	16	28	115	1.65
64.産科手術	163	256	105	352	350	401	380	2007	2.12
	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	総計	
総計	4177	4843	4577	5303	4895	5037	5195	34027	1.13
腹腔鏡／胸腔鏡手術	196	257	351	379	471	471	573	2698	

\*比率は (2011～2014)平均／(2008～2010)平均、  
耳鼻咽喉科の比率は 2012年に耳鼻咽喉科が廃止されたことにより  
2011年／(2008～2010年)平均 を取っています。

健康被害のデータは他の要因の可能性等を科学的に評価することが必要ですが、ことからは市民が健康を害することに関するデータです。放射能被曝の可能性が否定できない以上、一刻も早く市民の皆さんにお知らせすることが義務と心得てお伝えする次第です。